◆【海員随想】海員日記②　　下尾孝晴

　でもごく最近、２年ほど前からまたつけ始めた。形式というのか、毎日つけるなんてのはどうも負担になり、結局、賄いのオカズを書くぐらいのことがおちになるので、今つけているのは、普通の大学ノートに、気の向いたとき気の向いたことを、本を読んで感動すれば感動したことを、これは覚えて良い言葉だと思えば、その言葉を写しとるとか、航海の長さにワイフが恋しくなれば、入港前に書く手紙の内容をとうの昔に書いてしまうとか、とにかくなんでもかんでも、なにか絵が描きたいと思えば、まさしく恐ろしくヘタクソな絵を、その大学ノートの日記の中に描いてしまうのである。とにかく、今はこんな風に自由に書いている。そのせいか、気が向かぬときは、１カ月も 2 カ月も書かないが、気が向けば２枚でも３枚でも気の向くままに書いていく。

　日記もこんな風に書いていけば案外うまくいくもので、それなら明日から私もと考えられるだろう。それでよいと思う。別に誰に見せるわけじゃなし、世の中で、手紙の 1 通、ハガキの 1 枚も書かぬ人間なんていないのだし、ただこれまで書こうとして、自分流の書き方がわからなかっただけのことである。

　私は考えるに、世の中で鼻つまみ者にされている赤軍派うんぬんでも、けっこう天下の別荘に入れば、それなりにリッパな手記を書き上げることである。それに比べたら、私などの雑文は、まだまだとてもじゃないが、足元にも及ばない。せめて自分が死ぬときぐらい、辞世の一句、人生記録の 1 つぐらい残したいものだが「また先に行く。すまぬ」これじゃさえんな。

　まあ、そのころになればなんとかなろうと、日記兼雑文として記しているわけだが、古ぼけた一冊のノートを何年も持ち歩き、乗船電報を手にしたとき、なによりもいち早く忘れまいぞと、わがヘタクソな字でつづった己の記録をそっとスーツケースの下にしのばせるのも、怒涛はるか千里を乗り切る船乗りのユーモラスとして笑うまいぞ。そして私はこの日記に題名をつけた。どうせ私のすること。ガラクタ日記とつけてニンマリ。当分はまだなんにも記さないのである。

「海員だより」